禁酒法時代のアルフレッド・E・スミス
―民主党再編のきざし―

寺田　由美

はじめに

コラムニストのデイヴィッド・ブルックス（David Brooks）は、今のアメリカ民主党の核心的な問題点の一つは、情報化が進んだ現在、特に文化的な面でエリートの政党となっているにもかかわらず、未だに自らを弱者のための政党と考えている点にあると言う。そのうえで彼は、民主党にとって、文化的で都会的な情報化時代のエリート層―それは、グローバル化する世界にうまく対応できている人々でもある―が党の中心に位置しているという事実、そして彼らとともに強大な社会的・文化的権力を手にしているという事実を受け止め、「国を挙げた革新主義（a Whole Nation Progressivism）」とでも言うべき考えを採用することこそが、政治的責任を果たすことになると指摘する[1]。

今でこそ民主党は、ブルックスが言うようにニューヨーク市やシカゴ、ロサンジェルスのような東部・西部の大都市で優勢を占め、支持者のなかには大卒者や知識人、社会的・人種的正義の実現を目指す人々が多く含まれる、いわゆる「リベラル」な党として位置づけられている。しかしほんの 100 年前まで民主党は、依然として人種差別が深く根付く南部・西部に暮らしている白人でプロテスタントを支持者に持つ、現在の「リベラル」なイメージとは異なる政党であった。また、南部・西部では、この時代の政治的な一大争点である禁酒法を支持する人々も多かった。1928 年、この民主党から、進歩的（progressive）なニューヨーク州知事として名を馳せていたアルフレッド・E・スミス（Alfred Emanuel Smith）が大統領候補として出馬した。結果として、アイルランド系アメリカ人にしてカトリック教徒のスミスは共和党候補のハーバート・C・フーヴァー（Herbert C. Hoover）に大敗を喫したものの、ニューヨーク市、シカゴ、フィラデルフィア、ピッツバーグ、デトロイト、クリーヴランド、ボルティモア、セントルイス、ボストン、ミルウォーキー、サンフランシスコ、ロサンジェルスの 12 大都市はスミスに圧倒的な支持を与え、これはその後の民主党の方向性にも大きな影響を与えることになった[2]。

---

[1] David Brooks, “Democrats Need to Confront Their Privilege,” *The New York Times (*hereafter *NYT)*, November 4, 2021, accessed December 24, 2021, https://www.nytimes.com/2021/11/04/opinion/democrats-culture-wars.html；デイヴィッド・ブルックス「コラムニストの眼　米民主党のエリート政治」『朝日新聞』朝刊（2021 年 11 月 19 日）。

[2] Lisa McGirr, *The War on Alcohol: Prohibition and the Rise of the American State* (New York: W. W. Norton & Company, 2016),186-188; 青木怜子「アルフレッド・スミスと都市勢力」『聖心女子大學論叢』第 38 集（1972 年）、40 － 41 頁。

1928 年大統領選挙は経済の崩壊前夜に行われ、そのため経済的争点に関しては両政党の間でさほど大きな違いが見られなかったが、それに代わり、「人種・宗教・カルチャーの新旧」がイシューとされ、その象徴が全国禁酒法であった[3]。共和党のフーヴァーが大統領候補指名の受諾演説で禁酒法を「高貴な実験」として支持する姿勢を示したのに対し、スミスはこれに批判的な態度をとった。もともと、伝統的に禁酒法支持者の多い南部・西部を地盤としてきた民主党内では、候補者指名にあたり、禁酒法に批判的なスミスへの懐疑的な声は小さくはなかった。加えて、スミスがカトリック教徒であることへの反発もあり、彼の大統領候補指名が民主党という組織に動揺をもたらすことは容易に想像できたはずである。では、なぜ従来の民主党路線にそぐわないスミスが、大統領候補に指名されるに至ったのであろうか。

周知のように 20 世紀初頭のアメリカ合衆国（以下アメリカ）は、いわゆる革新主義の時代であり、スミスの選挙地盤であるニューヨークでも、ガス会社や保険会社の相次ぐ不正の発覚に伴い、様々な分野で改革の動きが強まっていた[4]。まさにこの時期、スミスは 1903 年の選挙でニューヨーク州下院議員に当選し、1918 年にはニューヨーク州知事に初当選した。以後、一度の落選を挟み 1928 年まで 4 期知事を務めたスミスは、進歩的な政治家として人気を集めることになる。しかし、民主党候補として出馬した 1928 年大統領選挙に敗れたのち、進歩的な政治家スミスは徐々に「変貌」する。その「変貌」をよく表しているのが、フランクリン・D・ローズヴェルト（Franklin Delano Roosevelt）との関係であろう。彼の跡を継いで 1928 年にニューヨーク州知事に出馬し、1930 年に再選に成功したローズヴェルトを当初は支援していたスミスであったが、1932 年の大統領選挙での候補者指名をめぐり 2 人の間で亀裂が深まり、その結果ローズヴェルトと彼のニューディール政策に対してスミスは批判を強めてゆくことになる。州知事時代にスミス自身が取り組んでいた労働者保護や福祉制度の拡充などを実現したニューディール政策に対して、なぜスミスはかつて自分の政策に投げつけられた、あまりに「社会主義的」、あるいは「共産主義的」との非難をするに至ったのであろうか[5]。結局、スミスの政策の革新性、「進歩」とは何であったのか、換言すれば彼の政治は何を目指していたのであろうか[6]。

クリストファー・M・ファイナン（Christopher M. Finan）は、歴史家によって長年無視されてきたアル・スミスの政治キャリアに関する研究は 2001 年以降にようやく本格的に始まったと述べ、その最大の理由として、1930 年代の変節に伴うスミスの評判とイメージの悪化を挙げる[7]。しかし

---

[3] 斎藤真「アル・スミスと民主党の再編」『現代アメリカの内政と外交』（東京大学出版会、1959 年）、164 頁。

[4] Christopher M. Finan, *Alfred E. Smith: The Happy Warrior* (New York: Hill and Wang, 2002, 62-63.

[5] Finan, *Alfred E. Smith*, 3; Terry Golway, *Frank & Al: FDR, Al Smith, and the Unlikely Alliance that Created the Modern Democratic Party* (New York: St. Martin's Press, 2018), 264-265; Robert Chiles, *The Revolution of '28: Al Smith, American Progressivism, and the Coming of the New Deal* (New York: Cornell University, 2018), 202-203.

[6] 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、48 頁。

[7] Finan, *Alfred E. Smith*, 4.

実際には、1958 年にオスカー・ハンドリン（Oscar Handlin）が、そして 1969 年にはスミスと同時代を生きたマシューとハンナのジョセフソン夫妻（Matthew Josephson and Hannah Josephson）が、スミスの政治キャリアを描き出し、スミスの州知事時代の政策とニューディール政策との連続性、革新性を強調している[8]。ポーラ・エルドット（Paula Eldot）もこうした連続性を強調し、スミスを「ニューディールの先駆者」と位置付ける[9]。リチャード・オコーナー（Richard O'Connor）やテリー・ゴウェイ（Terry Golway）もこの系譜に連なり、どちらかというと連続性に重きを置いて、スミスの政策を描いている[10]。研究者のみならず、近年に至るまでメディアでも、例えばスミスは「ニューディールの真の父（the real father of the New Deal）」といった具合に紹介され、スミスの政策とニューディール政策の連続性がしばしば強調される[11]。

他方、ウィリアム・レクテンバーグ（William Lechtenburg）やアーサー・シュレジンジャー・ジュニア（Arthur M. Schlesinger Jr.）といった研究者は、スミスをニューディールに連なる進歩的な政治家というよりもむしろ、20 世紀転換期の穏健な改革者として描く。レクテンバーグは、スミスは「第一に根本的には保守派」出身で、「資本主義社会という前提にいささかも疑問を持つことのなかった」穏健派の改革者であるとした。シュレジンジャーもまた、スミスは富の集中を問題視することのない「福祉リベラリズム」の立場に立ち、社会構造の根本的な変化ではなく、「産業社会の危険に対して個人を守る」ことに関心を寄せたリベラルであったとする[12]。

日本の研究者では、斎藤真がレクテンバーグらと同様、スミスを本質的に「保守」の政治家であるとする。斎藤によれば、元来スミスの「進歩」とは、まずもって「旧き農村に対する新しき都市という意味での「進歩」であり、都市それ自体の「保守」に対する「進歩」を意味したものでは必ずしもなかった」。だからこそ、農村的「保守」に対抗するために、都市の「保守」、すなわち政治マシンと結びつき、1928 年選挙の際にはジェネラル・モータース幹部のラスコブを選挙陣営の中核に据えたのであると論じた[13]。青木怜子は、労働者保護政策の一方、ビジネスへの不干渉と

---

[8] Oscar Handlin, *Al Smith and His America* (Boston: Little, Brown and Company, 1958); Matthew and Hannah Josephson, *Al Smith: Hero of the Cities: A Political Portrait Drawing on the Papers of Frances Perkins* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1969).

[9] Chiles, *The Revolution of '28*, 180; Paula Eldot, *Governor Alfred E. Smith: The Politician as Reformer* (New York: Garland, 1983), 379, 396-397.

[10] Richard O'Connor, *The First Hurrah: A Biography of Alfred E. Smith* (New York: C. P. Putnam's Sons, 1970); Golway, *Frank & Al*, 7-8

[11] Chiles, *The Revolution of '28*, 181; Joan Walsh, "Obama, the Triangle Fire and the Real Father of the New Deal," *Salon*, March 25, 2011, accessed December 24, 2021, https://www.salon.com/2011/03/25/obama_al_smith_and_the_triangle_fire/ ; Maurice Carroll, "Cuomo Wants to Go beyond Workfare to the Work Ethic," *NYT*, January 26, 1986, accessed December 24, 2021, https://www.nytimes.com/1986/01/26/weekinreview/cuomo-wants-to-go-beyond-workfare-to-work-ethic.html.

[12] Chiles, *The Revolution of '28*, 181; William E. Leuchtenburg, *The Perils of Prosperity, 1914-32* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958), 231-232; Arthur M. Schleginger, *The Crisis of the Old Order, 1919-1933* (Boston: Houghton Mifflin, 2003[1957]), 97.（アーサー・M・シュレジンガー（中屋健一監修、救仁郷繁訳）『ローズヴェルトの時代Ⅰ 1919 ～ 1933 旧体制の危機』、論争社、1962 年、79 頁。）

いう姿勢にニューヨークの政治家―より厳密にはニューヨーク市の政治家―であるスミスの地域主義的性格（provincialism）を見てとる。そして、1928 年大統領選挙時のスミスの政策は、「国家勢力のあり方や政策上の転換の任務を都市に負わせようとした大胆なものではなく、単に従来かえりみられなかった大都市の権利を主張し、その利益の擁護をはかったに過ぎなかった」とし、スミスを革新的な政治家としてアメリカ政治のなかに位置付けることに疑問を呈した[14]。また平田美和子は、ニューヨーク州知事時代の評判とは異なり、大統領候補としてのスミスは進歩派の改革者ではなかったと評し、この選挙を 30 年代の「ローズヴェルト革命」の基礎をなす「アル・スミス革命」と位置づけたサミュエル・ルベル（Samuel Lubell）の見方に疑問を呈している[15]。

ロバート・チリーズ（Robert Chiles）は、こうした二つのスミスの政治的立場に関する分析のいずれも、ニューディールというプリズムを通してスミスの政策を理解しようとしているに過ぎないと述べる。チリーズは、1930 年代から 1920 年代を振り返り、ニューディーラーによってもたらされた社会福祉の領域における成果の源にアル・スミスがいると主張することも、ニューディール政策と比較してスミスの言説はビジネスに融和的で、階級的なレトリックに欠けると指摘することも、1930 年代の大恐慌という大きな変動のなかで再定義された概念を 1920 年代の現実に無理やり当てはめることになると述べ、その危険性を指摘する。彼は、スミスが進歩的な知事であることや、彼の業績の多くにのちのニューディール政策の要素が見られることは否定せず、一方でスミスの革新主義はニューディール流のリベラリズムではないとする見方も正しいとしながら、1930 年代以降の民主党の国家形成に見られる広義の社会正義という概念と、1920 年代の都市化するニューヨークの状況を反映したスミスの人道主義や革新主義の関係は、連続というよりも「類似」しているといった方が正確ではないかと論じる[16]。

20 世紀アメリカ国家の制度とイデオロギーに全国禁酒法が大きな影響を及ぼしていることを見事に描き出したリサ・マガー（Lisa McGirr）は、禁酒法が一大争点となった 1928 年選挙について、民主党を再編させた「決定的選挙」と論じる。マガーは、スミスが都市移民労働者やアフリカ系アメリカ人といった新しい有権者を民主党に動員し、彼らを基軸とした新しい政党へと民主党が変化するきっかけをつくったが、それは今まで投票に赴かなかった男女を政治へと引き寄せるために禁酒法反対を戦略的に用いた結果であるとする。なぜならば、貧しい移民労働者やアフリカ系アメリ

---

[13] 斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、171 － 172 頁。

[14] 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、52 － 53 頁。

[15] 平田美和子「民主党の都市政党化と都市政治―ニューディール期を中心に―」『津田塾大学紀要』No. 14-[2]、1982 年、82 － 88 頁。一方、リチャード・ホーフスタッターは、ルベルの「ローズヴェルト革命の前にアル・スミス革命は存在したのである」という言葉を引きながら、共和党による都市支配はローズヴェルトによってではなく、スミスによって破られたとする（Richard Hofstadter, *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R*, New York: Vintage Books, 1955, 300-301)。

[16] Chiles, *The Revolution of '28*, 180-182, 204-205.

カ人にとって禁酒法は深刻な問題であり、その禁酒法への反対を訴えることで、彼らの目を政治に向けさせることに成功したからであった[17]。

本稿は、特に斎藤とマガーの枠組みに影響を受けながら、丹念にスミスの歩みをたどるゴウェイや青木、膨大な史資料からスミスの政治がニューヨークのみならずアメリカ全体の政治に与えた影響を分析するチリーズらの先行研究に依拠しつつ、大統領候補指名獲得に失敗した 1924 年の民主党全国大会までのアルフレッド・E・スミスの足跡を追う。そして、従来の民主党リーダー像にはそぐわない彼が 1920 年代、つまり禁酒法時代の民主党内で頭角を現した理由と彼の政治が 20 世紀の民主党再編に与えた影響について検討する。

1．タマニー・ホールとスミス

（1）政界に入るまで

本節では、スミスの自叙伝『今に至るまで』に依拠しつつ、彼の生い立ちを簡単に紹介する。

1873 年 12 月 30 日、アルフレッド・エマヌエル・スミスは、ニューヨーク市サウス・ストリート 14 番地にあるテネメントで、アイルランド移民の娘であるキャサリン・マルヴヒル（Catherine Mulvehill）とイタリア移民とドイツ移民の息子であるアルフレッド・エマヌエル・スミス（息子と同名）の間に誕生した。再婚で妻より 15 歳年上のアルフレッドは、アイルランド系ではなかったものの、妻と同様、カトリック教徒であった[18]。

1875 年 12 月 30 日に生まれた妹と母の妹である叔母を含むスミス一家が暮らしたのはマンハッタン第 4 区（ロワー・イーストサイド）で、この地域にはアイルランド系をはじめとして多くの移民が暮らしていた。ある新聞記者は、この地区では「チリコンカルネ（牛挽肉と豆をトマトソースとチリパウダーを加えて煮込んだメキシコ料理）を食べる中国人、チャプスイ（刻み肉・ネギやもやしなどの野菜・青豆などを煮込んだアメリカ式の中国料理）を食べるイタリア人、イディッシュ語を話すアイルランド人」を見かけると書いており、さまざまな文化がある程度平和裏に共存する、文化的に多元な地域であったことがうかがえる[19]。スミスによると、みんなが互いに知り合いで、冠婚葬祭にあっては近隣全員で祝い、あるいは悼み、しばしば集会所に集まっては政治に関する情報や意見交換を行ったという。総じてその時代、第 4 区の住民は老いも若きも政治に関心を持ち、若者たちは政治的地位獲得を目指していた、とスミスは振り返っている。また政治的な催しも盛ん

---

[17] McGirr, *The War on Alcohol*, 157-188.

[18] スミスの自叙伝では父方の家系は不明とされているが、その後の研究で父方の祖父はジェノバ生まれの水夫、祖母はドイツ系であることが判明した。Alfred E. Smith, *Up to Now: An Autobiography* (New York: The Viking Press, 1929), 5; Golway, *Frank & Al*, 15-16; Josephsons, *Al Smith*, 13-15; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、11 頁。

[19] Robert Slayton, *Empire Statesman: The Rise and Redemption of Al Smith* (New York: The Free Press, 2001), 10; Golway, *Frank & Al,* 22.

で、タマニー・ホールのような政治組織のリーダーたちが、地区の人のためにピクニックやパレードを行っていた[20]。当時の第4区では、集票のために日常的に選挙民の世話―就職から市民権獲得のための支援、軽犯罪を犯した者の身請けや家賃の立替え、働き手を失った一家の支援など―をするタマニー・ホールが強い影響力を持っていた。まさに、「第4区に育った少年たちにとって、政治は常に生活の中心」であり、「生活から離れた事柄や、見知らぬ人々の事柄ではなく、彼ら自身の社会の熟知された活動」であったと言えよう[21]。政治は観賞するものではなく、参加するものであった第4区で生まれ育ったことは、その後のアルフレッドの人生に大きな影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない[22]。

学齢期を迎えたアルフレッドは、7歳で聖ジェイムズ教区学校に入学し、そこで弁論の才能を発揮した。またこの頃、演劇に関心を持ちはじめ、教区の劇団に入り活躍した[23]。教師の手を焼かせるいたずらっ子のアルにとって、聖ジェイムズ学校での8年間の教育が正規教育の全課程となるとは、想像もしていなかったであろう。

荷馬車曳の父は大柄な働き者であったが、健康を害し、アルが13歳になる直前の1886年11月に亡くなった。一家の生活はたちまち困窮し、母が経営する食料品店だけではやってゆけず、アルフレッド少年も新聞売りをしたりして家計を助けた。しかし、1888年にスミス家の家計はどん底に陥り、ついに8年生であったアルは、卒業まであと２ヶ月を残すところで学校をやめて働きに出ることを決める。荷馬車に注文を伝える伝達係、チッカーテープの読み上げ係などを経て、1892年19歳の時、フルトン魚市場（Fulton Fish Market）に職を得た。帳簿係や発送係として働いたこのフルトン魚市場が、スミスに豊かな人生経験と社会教育を与え、それを誇りとする彼は、のちに州議会でコーネル大学だ、ハーヴァード大学だと自分の出身大学を誇らしげに発言する議員たちに出身大学を問われた際、「私は、F. F. M.（フルトン魚市場の頭文字）」と告げたというエピソードは有名である[24]。

魚市場で働く傍ら、アマチュア劇団に所属し活躍する21歳のスミスに、裁判所への召喚状を届けたり、調査にあたったりする陪審員委員会の仕事を仲介したのが、タマニー・ホールの選挙区ボス、トム・フォーリー（Tom Foley）であった[25]。以前から、スミスがフォーリーの経営する酒場に出入りしていたのも偶然ではなかったのであろう。タマニー・ホールはニューヨーク最大の民主党組

---

[20] Smith, *Up to Now*, 25-33.
[21] Handlin, *Al Smith and His America*, 18（訳は斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、150頁に従った）。
[22] Golway, *Frank & Al*, 29.
[23] Smith, *Up to Now*, 37-48.
[24] Smith, *Up to Now*, 14-17, 111-112; Golway, *Frank & Al*, 27; O' Connor, *The First Hurrah*, 26; Josephsons, *Al Smith*, 47-48; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、13頁。
[25] Josephsons, *Al Smith*, 48-49, 53; Golway, *Frank & Al*, 28-29; Smith, *Up to Now,* 43-49, 56-57.

織で、それぞれの投票区にリーダー、いわゆるボスを配置し、彼らの上に選挙区リーダー（ボス）、さらにその上には本部で市全体に目を光らせるリーダー（大ボス）が君臨する、集票を目的とする政治マシンであった。スミスは 1901 年、このタマニー・ホールに加入し、投票区のリーダーになった。そして、1903 年にはフォーリーの意向で州議会議員候補に指名され、対立候補を破り下院議員に当選する [26]。

この頃、スミスの私生活でも大きな変化があった。1900 年、陪審員委員会の仕事の最中に知り合ったキャサリン・ダン（Catherine Dunn）と結婚し、州議会議員候補に指名される 1903 年までの間に、3 人の子持ちになっていた [27]。

（2）タマニー・ホールとの関係

1904 年 1 月、オルバニーで議員としての生活をスタートさせたスミスであったが、議場で何が話し合われているのか全く理解できず、法案を持ち帰り、ひたすら勉強する日々を送っていた。ワスプ（White Anglo-Saxon Protestant）と共和党が支配する議会のなかで、無力感と疎外感に襲われるスミスを支えたのが、家族とトム・フォーリーであった。「言うべきことができるまで、口を開くな」、「どんなにつらい事実でも、真実を伝えることによって信頼を得ることができる」と、折に触れアドヴァイスをしてくれたタマニーのボスであるフォーリーを、彼が 1925 年に亡くなるまで信頼し、交流を持ち続けた、とスミスは書き残している [28]。

スミスは、フォーリー以外のタマニーのリーダーとも親交を結んだ。1911 年にタマニーの本部ボスであるチャールズ・マーフィー（Charles F. Murphy）との付き合いが始まり、毎週末レストランでほかの議員たちとともにマーフィーと会合を持ち、州の政策や政党戦略について話し合ったという。スミスは、工場の労働環境や母親年金などに関する重要な法案が、当該期のニューヨーク州議会で可決されることになったのには、マーフィーの熱心な支持があったからこそであると振返っている。マーフィーはアドヴァイスを与えるだけでなく、1919 年には女性参政権を定めた合衆国憲法修正第 19 条の批准審議のための委員会にメンバーとして参加し、社会運動や政治への男女平等な参加を促す発言をしている。この発言には、一足早くニューヨークで 1917 年に女性に対して参政権が与えられたことも影響していよう。1924 年に亡くなるまで、マーフィーはスミスを支え続けた [29]。

第一次大戦までの 20 世紀転換期、アメリカはいわゆる革新主義の時代で、様々な改革運動が展

---

[26] Chiles, *The Revolution of '28*, 14; Smith, *Up to Now*, 58-59, 65-68.
[27] Smith, *Up to Now*, 62-64.
[28] Smith, *Up to Now*, 76-78.
[29] Smith, *Up to Now*, 120-121, 191-192; Golway, *Frank & Al*, 47-48; Slayton, *Empire Statesman*, 117.

開されていた。そのなかにセツルメント運動や労働者保護運動のような広義の福祉運動も含まれていたが、ハル・ハウスのジェイン・アダムズ（Jane Addams）をはじめ、そうした運動には多くの女性が参入していた。女性改革者は、特に女性や子供の労働、寡婦や貧しい母親のための福祉に関する改革に熱心に取り組んでいたが、こうした運動は、のちに州知事となったスミスの政策に合流することになる。先のマーフィーの発言は、この事態を予感させるものでもあったが、マシン政治家と女性改革者の間に全面的な共感が存在していたというわけでもなかった。権力志向のマシン政治家は、概して男尊女卑的で女性の政治参加にも否定的である一方、女性改革者のなかには移民の文化に理解を示さない者もおり、また禁酒法や政治マシン解体を支持する者が多かった。それにもかかわらず、この一見相いれないように見える二つの政治的・社会的伝統は合流してニューヨーク州に独特で豊かな改革の流れを作り上げ、やがては全国的な民主党の方向性に、そして国のあり方自体にも影響を及ぼすことになる[30]。

タマニーとの関係は、しばしばスミスを非難にさらした[31]。集票機関でもある政治マシンは、票の見返りとして選挙区有権者の日常生活の面倒を見ることで一種の福祉的機能も果たしていたが、その仕組みが政治腐敗の温床になっているとして、改革者に強く批判されていたからである。しかし一方で革新主義の盛り上がりが追い風となり、州議会のなかで次第に頭角を現しつつあったスミスが打ち出す労働者や貧しい者のための政策に共感し、タマニー出身の政治家に対する懸念を小さくする人々が増え始めていた[32]。その中には、のちにF・ローズヴェルト政権下で労働長官に指名されるフランシス・パーキンス（Frances Perkins）、ニューヨークのセツルメント運動家リリアン・ウォルド（Lillian Wald）、女性や子供の労働者の環境改善に取り組んでいたベル・モスコヴィッツ（Belle Moskowitz）ら、女性改革者が多く含まれていた。

保険委員会や都市問題委員会などに委員として連なってきたスミスであったが、熱心な勉強ぶりが認められたのか、1911年1月、歳入委員会委員長という重要ポストに推される。これをきっかけに、スミスはいっそう労働者や困窮する者の問題解決に熱意を燃やすようになり、たとえば就労中の事故による傷害への補償を会社が負担することを規定した労災補償法の可決（1913年）に大きく貢献した。タマニー・ホールの傀儡的人物ではないかとのスミスへの疑いは徐々に薄らいでいたが、それを加速したのが1911年の大規模工場火災の発生であった[33]。

---

[30] William L. Riordan, ed., *Plunkitt of Tammany Hall: A Series of Very Plain Talks on Very Practical Politics* (New York: Dutton, 1963), 3-6; Michael E. McGerr, *A Fierce Discontent: The Rise and Fall of the Progressive Movement in America1870-1920* (New York: Free Press, 2003), 77-117; Chiles, *The Revolution of '28*, 14-15.

[31] Smith, *Up to Now*, 161, 210-211.

[32] Chiles, *The Revolution of '28*, 22-26.

[33] 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、15頁。

（3）トライアングル・ブラウス縫製工場の火災

1911 年 3 月 25 日、アル・スミスの政治キャリアに大きな影響を与えることになる工場火災が発生する。マンハッタンにあるトライアングル・ブラウス縫製工場で発生した火災は、146 名もの労働者の命を奪った。犠牲者の大半は、16 歳から 23 歳のイタリア系、ユダヤ系の移民女性で、火災発生時にドアの一つがロックされていたことがのちに判明する。スプリンクラーもなく、非常口も服地の束でふさがれた工場から逃げ出すために工場のある 8 階、9 階から飛び降りる女性の姿や、消火後の現場で発見された遺体は、ニューヨークの人々に大きな衝撃を与えた [34]。すぐに調査委員会が設置され、委員長にアッパー・イーストサイドを代表するドイツ系のロバート・F・ワグナー（Robert F. Wagner）、副委員長にロワー・イーストサイドを象徴するスミスが任命された。調査団には、女性労働組合連盟のメアリ・ドライア（Mary Dreier）、全国消費者連盟のフランシス・パーキンスも加わっていた。特にパーキンスは、ワグナーやスミスを女性や子供が多く働く工場に連れてゆき、その現状をふたりに目撃させるなど、一種の教育係のような働きをした。この経験は、スミスとワグナーのふたりの政治姿勢に大きな影響を与える。マシン流の「個々の救済ではなく、より広範な立法的な救済の必要性」を認識したふたりは、1912 年の州議会で工場規制に関する 8 つの法案、その後 1914 年までに防火対策、職場の安全確保、女性と子供のための労働時間や労働環境の規制などに関係する 36 もの法案を次々と議会に提出し、可決に持ち込んだ [35]。

父を失ったのち、家計を支えるために学校を中退し働きに出ざるを得なかったスミスにとって、調査の過程で目撃した女性や子供の劣悪な労働環境、職場の不衛生な状況、事故防止取り組みの欠如、長時間労働、労災とでもいうべき健康被害の実態は他人事とは思えなかった。だからこそ、火災調査を超えて労働状況に関する広範な調査を実施し、それを「人間としての生活の維持という目的のための活動」と考えた [36]。

1913 年、スミスは下院議長に選出され、そのポストにいる間に労災補償法の可決に尽力し、母親年金の実現や児童福祉法案の議会通過に取り組んだ [37]。法のなかには、タマニーと強いつながりを持つビジネスの反対を押し切って支持・可決にこぎつけた週休一日制を定めたものも含まれてい

---

[34] 20 世紀初頭のアメリカでは、労働時間の短縮や賃金アップを求めるストライキが頻発しており、多くの衣服製造会社はある程度の妥協を行ったにもかかわらず、火災を起こした工場を経営するトライアングル・ブラウス縫製会社は週 59 時間労働を維持し、労働環境改善にも消極的であった。寺田由美「ブレッド・アンド・ローズ―ローズ・シュナイダーマンの市民意識と個人の語り」槇原茂編著『個人の語りがひらく歴史―ナラティヴ／エゴ・ドキュメント／シティズンシップ―』（ミネルヴァ書房、2014 年）、100 － 115 頁。

[35] Smith, *Up to Now*, 90-96; Golway, *Frank & Al*, 56-62; *Chiles, The Revolution of '28*, 90-96; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、15 － 16 頁 ; 斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、151 頁 ; 西山隆行『アメリカ型福祉国家と都市政治 ニューヨーク市におけるアーバン・リベラリズムの展開』（東京大学出版会、2008 年）、101―102 頁。

[36] Smith, *Up to Now*, 93

[37] 1914 年選挙で共和党がニューヨーク州下院の多数派となったため、スミスの下院議長は 1 年で終わりを告げた。Golway, *Frank & Al*, 68-69; Smith, *Up to Now*, 127-130.

た。こうしたスミスの姿勢は、父を早くに亡くした自らの経験が反映された、実感を伴う血の通ったものであったがゆえに、都市移民労働者の間にスミス支持を広げてゆくことになった。スミスも都市移民労働者から寄せられる支持に応えるかの如く、1915 年ニューヨーク州憲法改正を考える会議では、英語テストを有権者に課すことを定めた識字テスト法案に、「この国にやってきて、一生懸命働き、子供を学校にやり、合衆国憲法と国旗に忠誠を誓い、法に従って生きるすべての男女は良き市民であり、また以前の人生のハンディキャップゆえに政治的な声を奪われるべきではない」と反対した[38]。一方、都市移民労働者の間でのスミス支持の拡大は、20 世紀転換期にやってきた新来移民―特にユダヤ系―の票を革新党や社会党に奪われるようになっていたタマニー・ホールにとっても好都合であった[39]。

こうした人気を背景にスミスは、1915 年から 2 年間ほどニューヨーク郡治安官を務め、1917 年のニューヨーク市長選挙の際には市長に次ぐポストである市参事会（Board of Alderman）の議長職についた[40]。そして 1918 年、14 年前にオルバニーに初登院した時には議場で何が進行しているのか全く理解できなかったアル・スミスが、知事に当選することになる。

２．「革新派知事」スミス

（１）民主党知事の誕生

自らが「人生で一番長かった日」と振り返る 1918 年 11 月 5 日の投票日まで、大都市出身のスミスは、民主党の伝統的地盤である農村的な州北部地域（アップステート）で苦戦を強いられた。民主党内にもカトリックで禁酒法批判の立場に立つスミスの候補指名に反対する勢力があったうえに、対立候補である共和党の老練な現職知事チャールズ・ホイットマン（Charles Whitman）は、スミスがカトリックであることや禁酒法に反対の立場であることを取り上げ、州北部地域のアングロサクソンでプロテスタントの有権者に向かってスミスの異質性を盛んに訴えた[41]。20 世紀転換期にカトリックを多く含む移民がニューヨーク州に大量に流入していたとはいえ、その大半はニューヨーク市のような都市地域に集中しており、州全体では依然としてアングロサクソン系やプロテスタントの白人有権者が多数を占めていた。彼らの多くは、宗教的に「異質」で、禁酒法に反対姿勢を見せるスミスを支持しないか、支持を躊躇しており、加えてスペイン風邪（インフルエンザ）の蔓延もあって、スミスにとって厳しい戦いが予想された[42]。そのスミスを、F･パーキンスや L･ウォ

---

[38] Golway, *Frank & Al*, 70-71; Smith, *Up to Now*, 142.

[39] Golway, *Frank & Al*, 68; Chiles, *The Revolution of '28*, 17; Annelise Orleck, *Common Sense and a Little Fire: Women and Working-Class Politics in the United States, 1900-1965* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1995), 15-86; 西山『アメリカ型福祉国家と都市政治』、97―99 頁。

[40] スミス自身はこのポストを退屈に感じ、あまり満足していなかったようである。Smith, *Up to Now,* 157; Golway, *Frank & Al,* 78; Slayton, *Empire Statesman*, 115. なお、市参事会は 1938 年に廃止され、代わって市議会が設立された。

[41] Smith, *Up to Now,* 162-169; Golway, *Frank & Al*, 79-81; Josephsons, *Al Smith*, 202-205; O' Connor, *The First Hurrah*, 97-99.

ルド、ヘンリとベルのモスコヴィッツ夫妻のような社会改革者、あるいは著名な弁護士であるユダヤ系のジョゼフ・プロスカウアー（Joseph Proskauer）らが支えた。ちなみに、1918 年知事選はニューヨーク州知事選としては初めて女性が投票に参加し、パーキンスやモスコヴィッツのようにスミスを支持した女性たちがいた一方、女性キリスト教禁酒同盟のメンバーのように、スミスに強力に反対する女性たちも存在した [43]。

スミスの厳しい選挙戦に追い風となったのは、投票日直前の 1918 年 11 月 1 日に発生したブルックリン＝マンハッタン交通の地下鉄事故であった。当時運転士がストライキ中であったため急遽乗務することになった、列車が運行するブライトンビーチ路線に不慣れなうえにたった 2 時間しかトレーニングを受けていない従業員が起こした事故であった。遅れを取り戻すためにスピードを上げた列車はカーブを曲がり切れず脱線したままトンネルに入った直後、コンクリート壁に激突し、93 人の死者と多数の負傷者を出した。以前からスミスは、地下鉄のような交通機関をはじめとする公益事業を監督するホイットマン知事直轄の公益事業委員会が、きちんと仕事していないと警告を発していた。事故は、この警告が現実のものになったかのように思われた。すぐさまスミスは、今回の事故は労働環境などに対する行政による管理の失敗から引き起こされたと批判し、ホイットマン知事の政治責任を厳しく追及した。苦境に立たされた現職知事のホイットマンは緊急調査を行ったものの、投票日直前のこの事故のダメージは大きく、ホイットマン自身もこの事故が選挙の潮目を変えたと認めた [44]。

結局、1,009,936 票対 995,094 票という僅差でスミスが勝利した。スミスは大勝したわけではないが、他州で多くの民主党現職知事が敗北し、連邦議会でも民主党が敗北した年に、共和党勢力の強いニューヨーク州で民主党知事が誕生したことは興味深い。スミスが生まれた第 4 区では、彼に 387 票が投じられた一方、ホイットマンはわずか 2 票を獲得したに過ぎなかった [45]。ロワー・イーストサイドの人々とスミスの強い結びつきが感じられる結果であろう。押しなべてスミスは移民労働者の多い都市部で票を伸ばしたが、この傾向は 1928 年大統領選挙においてもみられる [46]。そもそも 1928 年までは概ね、南北戦争以来大企業や製造業者によって支持されてきた共和党が北東部の工業都市を政党の地盤とし、それに対して民主党は、農業が産業の中心である南部・西部を地盤としていた。1896 年大統領選挙で、民主党候補のウィリアム・J・ブライアン（William Jennings Bryan）が「額に汗して働く労働者」として農業従事者と都市労働者に共闘を呼びかけ、反金融資

---

[42] Golway, *Frank & Al*, 81; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、17 頁。
[43] Slayton, *Empire Statesman*, 115-119.
[44] Josephsons, *Al Smith*, 206-207; Golway, *Frank & Al*, 83-85, 88; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、17 － 18 頁。
[45] Smith, *Up to Now*, 167-168. スミスは自分に投じられなかった 2 票を気にしていた。
[46] スミスは、マンハッタンとブルックリンでは 186,000 票差で勝利したが、その二つの自治区の外側の三つの区（ブロンクス・クィーンズ・スタテン島）では 132,000 票差で敗れた（Slayton, *Empire Statesman*, 120）。

本の姿勢を打ち出し、いくつかのビジネス規制を提唱したものの、都市移民労働者に強くアピールすることはできなかった[47]。民主党が政権の座を明け渡した 1896 年から 1932 年までの間、ウィルソン政権期（1913 － 1921 年）を除いて、共和党が政権を握ることがアメリカの「常態」となっていた。こうしたことを鑑みれば､移民労働者の多い都市部で民主党のスミスが勝利を収めたことは、その後の民主党再編を予兆させるものであったと言えよう[48]。

スミスが都市部での支持を伸ばした理由の一つに、民主党の集票機関であるタマニー・ホールの戦略変更が考えられる｡もともとアイルランド系の票を取りまとめることを目的としていたタマニーであったが、20 世紀初頭の南欧・東欧からの移民の流入とアフリカ系アメリカ人の南部から北部への移動に直面し、組織のリーダーは社会主義者の挑戦をうまくかわすのみならず、民族間の不和を回避し、新来移民やアフリカ系を取り込む必要に気づいた。そのため、禁酒や安息日厳守を強制する法や､識字テスト､国別割当制のような差別的な移民政策に反対するようになっていった[49]。また、1898 年にはふたりの元共和党支持のアフリカ系アメリカ人によって、「合同黒人民主主義（United Colored Democracy）」という民主党組織がつくられ、タマニーはこれに選挙支持への見返りとしてパトロネージ（役職の分配）を与えた。もっとも市レベルでも州レベルでも、アフリカ系が民主党内に白人と一緒に統合されることはなく、彼らに与えられる役職も消防署の調査官助手や地区検察官助手どまりであったが、南北戦争以後、共和党の地盤の一角をなしていたアフリカ系を取り込むべく、20 世紀転換期に始まったタマニー・ホールとスミスの動きは、その後の民主党の行方を予兆させるものであったと言えよう[50]。

たしかに、こうしたタマニー･ホールとスミスの動きは、ますます文化的に多元化するニューヨークという一地域の現状に影響されているため、限定的で、全国的な動きとして捉えることはできないとの青木の指摘を否定できない[51]。しかし、少し先走りになるが、スミスの革新主義的な政策を熱烈に支持した都市移民労働者が、1932 年にそのスミスを破って民主党大統領候補に指名され、大統領となるフランクリン・ローズヴェルトとそのニューディール政策をやはり熱心に支持したことを考えると、1918 年のニューヨーク州知事選挙はアメリカの政党政治の流れが変わる重大な局面のひとつであったのではないだろうか。

---

[47] 寺田由美「一九世紀末の民主党の転換―ウィリアム・ジェニングス・ブライアンの政策を中心に―」『西洋史学報』18 号（1991 年 4 月）、23 － 48 頁。

[48] Lisa McGirr, *The War on Alcohol*, 161; Slayton, *Empire Statesman*, 120-121.

[49] Chiles, *The Revolution of '28*, 29. 新来移民の多数をイタリア人が占めていたが、ニューヨークではイタリア系の多くは共和党を支持していた。McGirr, *The War on Alcohol,* 162.

[50] Cary D. Wintz, Paul Finkelman, eds, *Encyclopedia of the Harlem Renaissance*,vol.2 (New York: Routledge, 2004), 1193; Chiles, *The Revolution of '28*, 28.

[51] 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、19 頁。

（2）赤狩りのなかの1期目

スミスは1919年から1929年まで、一度の落選を挟んで、一期2年の知事を4期務めることになる。

スミスの1期目は、第一次大戦の休戦協定締結直後ということもあり、戦後復興を課題として公衆衛生や健康保険、住宅や雇用の問題に力を入れ、こうした問題を話し合う場として復興委員会（Reconstruction Commission）を立ち上げた。知事の私的団体として運営されたこの委員会は、労働者とその家族のための健康保険法の制定や州が出資する健康センター設立、最低賃金法、女性労働者のための8時間労働法、住宅不足の解消などの革新主義的な政策を精力的に打ち出したものの、これらは「社会主義的」であるとか「非アメリカ的」で「不健全」であると批判され、その実現は難航を極めた[52]。結局公衆衛生や福祉、あるいは労働者のための制度や法が整備・拡充されるのはスミスの知事として2期目以降のことであった[53]。

この背景には、戦後の落ち着かない雰囲気のなか、アメリカ全土で人種暴動や労使紛争、赤狩りが発生し、社会不安が高まっていたことがあった。ニューヨークでも、ブルックリンやマンハッタンでストライキが頻発していた。約4,000人の労働者が参加したローマ製銅会社のストライキ勃発に際して、スミスは州産業委員会メンバーのフランシス・パーキンスを派遣した。当初は仲裁役として女性が送られてきたことにショックを受けていた会社幹部も、彼女の調査能力と論理的な説得に感服し、ついにはストライキ収拾と同時に労働時間と賃金の改善、将来的な労働組合の設置を認めることになった[54]。こうしてパーキンスは、スミス知事の福祉制度策定者のひとりとなった。そのパーキンスだけではなく、モスコヴィッツ、ウォルド、メアリ・ヴァン＝クレーク（Mary van Kleeck）、モリー・ドーソン（Molly Dawson）、そしてエレノア・ローズヴェルト（Eleanor Roosevelt）といった多くの女性社会活動家たちが、その後のスミスの政治を支持してゆくことになる[55]。

「赤の恐怖」が大きくなるなか、1919年秋、ニューヨーク州議会に5人の社会党議員が誕生した。この5人の議員を追い出そうとする議会内での動きの強まりにスミスは反対を表明するが、結局5人は投票の結果140対6で停職にされてしまう。この議会の動きをスミスは、「社会党の基本原理には全く反対であるが、合法的な方法で、正直に獲得した議席を引き継いでいる限り……正当に設

---

[52] この委員会には、モスコヴィッツを中心に大学出の知識人や社会運動家が加わり、スミスの政治を助けた。斎藤はこの復興委員会に集った人材が、のちにニューディール下で「ブレイン・トラスト」としての役割を果たすことになると述べる（Slayton, *Empire Statesman*, 130-132; 斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、154―155頁）。

[53] Smith, *Up to Now*, 186-189; Chiles, *The Revolution of* '28, 34-44; David R. Colburn, "Alfred E. Smith and Red Scare, 1919-20," *in Political Science Quarterly*, vol. 88, no.3 (September 1973), 427. 唯一、労災補償法の再修正は1期目に実現した。

[54] Smith, *Up to Now*, 177-178; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、20 － 21頁。

[55] Chiles, *The Revolution of* '28, 101-108. チリーズはまた、アリス・ポールのような「平等権フェミニスト」や第一次大戦終結の際のフーヴァーの人道主義を高く評価するジェイン・アダムズのように、スミスに反対するソーシャルワーカーやフェミニストも存在していたことを指摘する。

立され、かつ合法的に組織されている少数党から表現の自由が奪われるべきというのは全く信じがたい」と非難した[56]。デイヴィッド・コールバーン（David R. Colburn）は、こうしたスミスの発言の背後に、アイルランド系、イタリア系の血を引き、ロワー・イーストサイドの住人でもあった彼の思いを指摘している[57]。結局、スミスの批判にもかかわらずニューヨーク州議会は、5 人の停職に加えて、公職から社会主義者やそのほかの急進主義者を排除したり、公立学校の教師に忠誠テストを課したりすることを目的とした一連の法律―提唱者の上院議員クレイトン・ラスク（Clayton Lusk）の名からラスク法と呼ばれる―を可決する。スミスはこの一連の法律は、衝突しながらも進歩を生み出してきた「議論」を強制的に禁止することになり、それによって「寛容と知的自由が破壊され、人々には知的な独裁権力が課せられる」とし、何れに対しても拒否権を発動した[58]。

『ニューヨーク・タイムズ』のような有力新聞でさえ州議会の社会党議員の処分を支持した時代にあって、これをはっきりと非難し、「われわれのアメリカ民主主義への信頼は、結果によってのみではなく、表現の自由という方法と機能によっても強められる」と主張したスミスが、1930 年代後半にニューディールを社会主義や共産主義というイデオロギーから批判するようになるのは皮肉なことであろう[59]。

（3）1922 年の再選

福祉改革が思うように進まないことにフラストレーションを覚えながらも、行政改革を優先することで将来的な福祉改革の実現を目指そうと考えたスミスは、州の機関や省庁の統廃合による行政の効率化、知事の権限強化を目指した。しかし、この行政改革案が 1920 年の再選を目指すなかで、共和党対立候補のネイサン・ミラー（Nathan Miller）の攻撃対象となってしまう。スミスの「パターナリスティック」な計画経済が州の財政を逼迫させるとの攻撃に対し、政府の莫大なコストを解決するためには政府の効率化しかないと反論したものの、7 万 4,000 票差でスミスは敗れた。ただし、1920 年はあらゆる選挙で民主党が敗北を喫しており、同年の大統領選挙では、スミスと同じニューヨーク出身の民主党副大統領候補フランクリン・ローズヴェルトも落選している[60]。そうした状況のなか、敗れたとはいえ、7 万 4,000 票差やニューヨーク市での得票数、あるいは無党派層や進歩的な共和党員の票の獲得などを考慮すると、スミスは善戦したと言えよう[61]。

---

[56] Smith, *Up to Now*, 199-202; Golway, *Frank & Al*, 94-95; O'Connor, *The First Hurrah*, 117; Colburn, "Alfred E. Smith and Red Scare," 430-433.

[57] Colburn, "Alfred E. Smith and Red Scare," 425.

[58] Smith, *Up to Now*, 204; 斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、156 頁。

[59] Colburn, "Alfred E. Smith and Red Scare," 432; *NYT*, September 23, 1920; Chiles, *The Revolution of '28*, 199-204.

[60] 平田は、1920 年が共和党と都市との結びつきが最も強い年であり、その後都市における共和党の力は徐々にかげり始めたと述べる（平田「民主党の都市政党化と都市政治」、74 － 78 頁）。

「公職につくということに関する限り、私の政治生命は終わったと思っていた」と振り返っているように、スミスは選挙後、オルバニーを離れ、ニューヨーク市で輸送会社の取締役につき、彼の言葉を借りると「なじみの環境でなじみの人々」に囲まれて穏やかな日々を送っていた[62]。しかし、それも長くは続かなかった。1922 年の知事選で、スミスとも因縁浅からぬウィリアム・ランドルフ・ハースト（William Randolph Hurst）を候補に推す動きが持ち上がり、これを懸念する人々から出馬を求められたのである。社会的名誉欲の強いハーストは、次期ニューヨーク州知事、もしくは合衆国上院議員のポストを狙っていたが、フランクリン・ローズヴェルトをはじめとする彼を信用することのできない多くの民主党員たちがハーストの出馬を阻止すべく、スミスに出馬を促したのであった。スミスが知事を務めていた 1919 年、ハーストは牛乳価格の高騰は知事が業者と結託した結果であると、自分が社主を務める『ニューヨーク・ジャーナル』をはじめとする新聞に書きたてさせた。これに激怒したスミスからカーネギーホールでの討論会を挑まれた挙句、姿を見せることなく西部に去っていったハーストを、「このうえなく見下げ果てた人物」としてスミスは軽蔑していた[63]。ローズヴェルトに背中を押される形で候補指名を受ける決意をしたスミスは、ハーストが合衆国上院議員候補に民主党から出馬するのであれば自分は知事の指名を断ると民主党幹部に迫り、結局ハーストは知事候補からも上院議員候補からも撤退するしかなかった[64]。

民主党から候補指名を受けたスミスは、1922 年、再び現職知事であるネイサン・ミラーと戦うことになった。民主党女性メンバーの集会でエレノア・ローズヴェルトが、「ニューヨーク州の女性たちは、ミラー知事の福祉関連の法案への態度や、女性や子供たちにとっての長時間労働の危険性への無関心ぶりに大いに腹を立てている」と発言したように、ミラーの経済政策や労働対策はかなり保守的であった[65]。そうしたミラーに対しスミスは、水力発電のような公益事業の私企業による独占を批判し、効率的な行政のための改革を主張し、州議会議員時代から取り組んできた労働者の権利の強化を訴え、思想や言論の自由を制限する法に反対する論を展開した。こうして迎えた投票日、スミスは 387,000 票というニューヨーク州知事選挙史上最大の得票差で勝利をおさめた。彼が、州南部の大都市で大量の票を獲得しただけでなく、共和党の地盤であった州北部地域、特にバッファロー、シラキュース、ロチェスター、オルバニーといった都市（地図参照）でも多くの票を獲

---

[61] Chiles, *The Revolution of '28*, 60-61; Golway, *Frank & Al*, 102-112; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、23 頁。1920 年大統領選挙では、共和党のウォーレン・G・ハーディングとカルヴィン・クーリッジのコンビが、一般投票の 61％、選挙人 404 人を獲得した一方、民主党のジェイムズ・コックスとローズヴェルトのコンビは 127 人の選挙人を獲得するにとどまった。民主党の失敗は、労働政策や経済政策において、共和党との明確な違いを打ち出せなかったことにあると思われる。

[62] Smith, *Up to Now*, 222-223.

[63] Smith, *Up to Now*, 195-196, 229-232; Golway, *Frank & Al*, 97-99, 117, 119-123. 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、23 － 24 頁。

[64] Smith, *Up to Now*, 232.

[65] Golway, *Frank & Al*, 120

得したことは注目に値する[66]。

1923 年、アル・スミスの知事としての 2 期目が始まった。スミスは、1 期目の課題であった女性と子供のための 8 時間労働法、最低賃金法、労災補償制度の強化に加えて、ラスク法の廃止、映画の検閲法の廃止、州による水力開発、市の公益事業の所有、5,000 ドル以下の年収に対する州所得税の免除、家賃規制の継続、州憲法を改正してニューヨーク市をはじめとする州内の地方都市へのより大きな権限と予算の付与を定めることなどを、アジェンダとして打ち出した[67]。その一方、何よりも彼を悩ませることになる問題が、この時期表面化する。それが、禁酒法問題とクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan. 以下 KKK）への対応であった。

【ニューヨーク州地図】

https://gisgeography.com/new-york-state-map/ より作成

---

[66] Smith, *Up to Now*, 245; Golway, *Frank & Al*, 125; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、24 － 25 頁。

[67] Smith, *Up to Now*, 266-267; Golway, *Frank & Al*, 127. 1923 年、ニューヨーク市をはじめとする州内の地方政府が組織改革などを独自に行うことを可能にしたホーム・ルール法が州議会で制定され、また酒税、抵当税、自動車登録税など新設の税の多くが地方政府の財源とされた（西山『アメリカ型福祉国家と都市政治』、117 頁）。

3．1924 年民主党全国大会

（1）マラン＝ゲイジ法の廃止

1923 年 5 月 9 日、ニューヨーク州議会である法の廃止が決定され、物議を醸した。周知のようにアメリカでは、1919 年 1 月、飲用目的のアルコールの製造・販売・運搬・輸出入を禁じた憲法修正第 18 条が制定された。さらに同年 9 月には、修正 18 条の連邦施行法として、アルコール度数 0.5％以上の酩酊性飲料の製造等を禁止したヴォルステッド法が成立し、翌年 1 月から施行された。1921 年に制定されたマラン＝ゲイジ法は、ヴォルステッド法のニューヨーク版とも言える。そのマラン＝ゲイジ法が州議会で廃止され、知事の署名を待つばかりになっており、州のみならず全国からその行方に注目が集まっていた。

もともとスミスは禁酒法の偽善を嫌っていたし、タマニー・ホールもかねてからこの法の廃止を求めていた。1922 年にシカゴを訪問した際、スミスはライトワインとビールの合法化を支持する集会に参加し、禁酒法は他者の習慣をコントロールしようとする少数者による、役に立たない、偽善的で、専制的な試みであると述べている[68]。それにもかかわらず、1924 年大統領選挙への出馬を真剣に考えていた彼は署名を躊躇した。全国禁酒法問題は、来る大統領選挙の最も重要な争点になりつつあることを認識していたスミスのアドヴァイザーたちが、ドライ派（禁酒法支持派）の民主党員の離反を恐れて、スミスに慎重な対応を求めた結果である[69]。マラン＝ゲイジ法の廃止を認めた州議会の決定を承認することで、州知事としては新来移民の増加に伴い州内に強まりつつあった禁酒法廃止の要望を満たすことになる一方、国全体で見ると民主党の選挙地盤である南部・西部のドライ派と対立することになり、翌年の大統領選挙で不利になることが予想され、スミスはジレンマに陥った。ドライ派、ウェット派（禁酒法反対派）の双方から続々届く陳情の手紙を読み、また市民も招いて法の廃止を議論する公聴会を開くなど、30 日間悩みぬいた末、6 月 1 日、ローズヴェルトらの反対を押し切ってスミスは法案に署名することになるが、その決定にはタマニー・ホールのボス、チャールズ・マーフィーが関与していたとされる。マーフィー自身、タマニーのボスらしく酒場の経営者であった。そうしたこともあって、マーフィーはマラン＝ゲイジ法廃止法案に署名するようスミスを説得し、「この署名を行わない限り、大統領選挙でも知事選挙でも、今後一切の協力はしない」と語り、席を立ったとされる[70]。ニューヨーク市を牛耳るマーフィーにとって、自分の権力基盤であるところの都市有権者の声を優先するのは至極当然のことであったと言えるが、大統領選に打って出ようとしているスミスにとっては一大決心であったと思われる。実際この大胆な行動は、州内の都市移民労働者からの支持を集め、さらにスミスの全国的な認知度を上げること

---

[68] McGirr, *The War on Alcohol*, 166.
[69] Smith, *Up to Now*, 268; Chilies, *The Revolution of* ’28, 109.
[70] Golway, *Frank & Al,* 130-131; O’Connor, *The First Hurrah*, 143; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、26 頁。

につながったが、一方でアメリカ国内のドライ派の間にスミスへの敵意を醸成し、それは 1924 年の大統領候補指名争いや、1928 年の大統領選にも影響を及ぼすことになった。

スミスが決定を下す前、ハーヴァード大学教授で、のちに合衆国最高裁判所判事に就任するフェリックス・フランクファーター（Felix Frankfurter）は、「マラン＝ゲイジ法廃止法案が持つ性質は、この男［スミス］の気概を明らかにするだろう。彼が廃止に拒否権を発動すれば、彼は比較的短い間批判されるだけであろうが、……もし署名すれば、かなり長い間非難されるであろう」と予想していた[71]。その予想通り、州内外のドライ派から、背信者、合衆国憲法への脅威としてスミスは非難され、「ラムとローマ・カトリック」のあだ名で呼ばれる羽目になった。例えば、民主党の大物政治家ウィリアム・J・ブライアンは新聞紙上で、「スミス知事は簡単に自分の知事としての仕事を汚し、自らの名を汚した。しかし、彼にこの国を泥濘の中で再び転げまわらせたりはしない」と発言し、スミスの大統領候補指名阻止をほのめかした[72]。

スミスが廃止法案に署名した 1 年後の 1924 年 6 月、波乱の民主党全国大会がニューヨーク市で開催される。

（2）「幸福な戦士」

6 月 24 日にマディソン・スクェア・ガーデンで始まった全国大会は、7 月 9 日まで続き、1968 年のシカゴ大会までの民主党の歴史の中で最も議論百出の波乱の大会となった。地元開催ということもあり、ニューヨークの移民たちは全国禁酒法への反対と KKK への反発を見せつけるべく、大会会場に集まってきたが、一方で、スミスの禁酒法廃止支持の姿勢に反発した人々が中西部・南部から大勢集まり、その中にはクランの姿も多く見られた。ワシントン DC でもセントルイスでもどこでもいいから、ニューヨーク以外の場所に大会開催地を移すべきではないかと提案したブライアンが予想したとおり、会場には不穏な空気が漂っていた[73]。こうした雰囲気のなかで始まった大会は、候補の人選と党綱領の採択とで紛糾する。

大会を紛糾させた原因の一つは、KKK の存在にあった。1920 年代、復活した KKK は中西部を中心に政治的影響力を急速に拡大していた。1915 年にアトランタで結成された第二次 KKK は、「100％アメリカニズム」を標榜し、入会資格を「アメリカ生まれで白人プロテスタントの成人男性」に限定するなど排外主義的性格の友愛団体として出発した。やがて白人至上主義、反カトリック、反ユダヤ主義を打ち出し、移民規制を全面的に支持し、社会主義や共産主義といった急進主義に対して激しい非難を行うようになっていった。他方、第二次 KKK は、慈善活動や公教育の改善と並び、

---

[71] Golway, *Frank & Al*, 128; Slayton, *Empire Statesman*, 201.

[72] *NYT*, June 10, 1923, in Golway, *Frank & Al,* 133.

[73] McGirr, *The War on Alcohol*, 168. スミス自身も私生活で、大会直前にマーフィーと母を失い、悲しみの中にあった。

法の厳正な施行を求める主張を積極的に行った。法の施行に関しては、特に厳格な禁酒法施行の実現に力を入れ、反酒場連盟や女性キリスト教禁酒同盟と密接に連携して活動を展開することもあった[74]。1924 年の民主党全国大会に乗り込んできたクランは、スミスの最大のライヴァルと目されたウィリアム・ギブス・マカドゥ（William Gibbs McAdoo）を支持していた。1863 年にジョージア州で生まれたマカドゥは、前回の大会でも第一回目の指名投票で本命のコックスを僅差ながら上回り、さらにウィルソン政権下で財務長官を務めたこともある、経験豊富な政治家であった。加えてウィルソンの娘婿で、宗教的にはプロテスタントの彼は、ポピュリズム、ニューフリーダムの継承者として、「民主党の正統派の候補」とされた[75]。都市政治マシンの申し子で禁酒法反対の立場をとるカトリックのスミスに比べるとマカドゥは、クランや禁酒法支持者にとってはるかに好ましい候補であった[76]。マカドゥ自身も、ニューヨークは「腐敗に根差し、貪欲さに導かれ、利己心に支配されている」と述べるなど、指名を勝ち取るための戦略として反都市のレトリックを積極的に使った。この結果マカドゥは、南部・西部を中心に農村を基盤とした集団の、そしてドライ派の代表としてとらえられるようになった。こうして、はっきりと東部都市対南部・西部農村地帯という構図ができあがり、民主党は分裂の危機に立たされた。

党大会で、スミスの応援演説に立ったのはフランクリン・ローズヴェルトであった。1921 年にポリオに罹患してからはじめて公の場に姿を現した松葉杖のローズヴェルトが、息子の手を借りて壇上にあがり、汗だくになりながら演壇にたどり着くと、聴衆は一斉に拍手喝采した。壇上でローズヴェルトは力強く、スミスが議員として、知事としていかに多くの「進歩」的な業績―児童労働禁止法、母親年金、公衆衛生促進プログラム、労災補償法、ハイウェイ建設、公立学校への支援増加など―を成し遂げてきたかを論じ、民主党候補にふさわしい人物であることを訴え、スミスのそうした業績を列挙するたび、「それこそが進歩である！（That is progressive!）」という言葉で締めくくった[77]。ゴウェイは、この言葉を繰り返すことでローズヴェルトは、ブライアンやマカドゥらに、革新主義的な政治はたんに飲酒や都市や移民への反対として定義されうるものでもなければ、南部の畑や、時には北部都市においてでさえ十字架を燃やすような人（クラン）によって定義されうるものでもないということを語ろうとしていたと指摘する[78]。

---

[74] 寺田由美「全国禁酒法施行をめぐる混乱―イリノイ州ヘリンの「禁酒法戦争」―」『アメリカ史研究』第 43 号（2020 年 8 月）、27 － 30 頁。斎藤真は、第二次 KKK を「反動」化した「進歩」の端的な象徴とした（斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、162 頁）。

[75] 斎藤「アル・スミスと民主党の再編」、162 頁。

[76] 青木「アルフレッド・スミスの都市勢力」、27 頁。

[77] “Happy Warrior Speech,” accessed December 24, 2021, https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b3/Happy_Warrior_Speech.pdf; Golway, *Frank & Al*, 154-155; 佐藤千登勢『フランクリン・ローズヴェルト』（中公新書、2021 年）、58 － 59 頁。

[78] Golway, *Frank & Al*, 155.

ローズヴェルトは演説が終わりに差しかかった時、スミスについて以下のように語った。

彼は、彼を前にした反対者をひるませるだけの、間違いや悪事を攻撃する力を備えている。彼はあらゆる聴衆に、彼が話す内容に関して、誠実さだけなく正当性を伝えるパーソナリティの持ち主である。彼は政治という戦場の「幸福な戦士」である[79]。

「政治という戦場の幸福な戦士」とは、イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）が、ナポレオン戦争で活躍した海軍提督ホレーショ・ネルソン（Horatio Nelson）を称えた言葉であるが、この印象的なフレーズは以後スミスの代名詞となった[80]。このローズヴェルトのスピーチに聴衆は熱狂し、あまりの歓声に指名候補の名前を告げる彼の声がかき消されるほどであった。

スピーチでローズヴェルトは、スミスの知事としての業績を歯切れよく列挙し、スミスを嘘や偽りのない真の政治家、労働大衆の擁護者であり良き友と称えたが、一方で問題視されているスミスの禁酒法に対する姿勢に関しては、以下のようにやや曖昧に擁護した。

結局、合衆国憲法の味方であると説明するために、共和党はこの国を駆けずり回らねばならない。われわれ（民主党）の方ではそうした行動は必要ない。

彼は［知事として］法を施行してきた。彼は合衆国憲法には説明の必要がないと信じている。公僕としての 20 年間の彼の記録が、彼が憲法 1 章から 7 章まで、そして修正 1 条から 19 条までを固く守ってきたことを証明している[81]。

マラン＝ゲイジ法廃止法案に署名したことで、ドライ派から憲法を軽視していると批判されているスミスを擁護するための発言であったと思われる。

1924 年民主党全国大会の最高の瞬間として記憶されたローズヴェルトのスピーチであったが、ローズヴェルトの病をおして大会に臨んだ勇気と素晴らしいスピーチがもたらした高揚した雰囲気は、党綱領の採択をめぐる議論と候補者指名をめぐる騒ぎの中でたちまち消え去っていった。

---

[79] “Happy Warrior Speech”.

[80] Smith, *Up to Now*, 288; 佐藤『フランクリン・ローズヴェルト』、59 頁。ジョセフ・プロスカウアーが提案した「幸福な戦士」のフレーズの使用に、当初ローズヴェルトは抵抗していたという（Slayton, *Empire Statesman*, 209-210）。

[81] “Happy Warrior Speech”.

（3）党綱領採択と候補者指名をめぐる騒動

党綱領採択にあたって厄介な問題は、禁酒法問題と並んで、クランに対してどのような姿勢を打ち出すかということにあった。綱領を審議する場には、クランを「非アメリカ的」として名指しで非難する決議案と、クランのみを名指しするのではなく、秘密結社全般を非難する決議案とが提出され、この二案をめぐり長時間の議論が交わされた。

スミス陣営は、カトリックであることや移民の多い都市の出身であることを理由にスミスの大統領候補指名を阻止しようとする KKK の狭量で独善的な主張こそ、自由の国アメリカでは許されるべきではなく、綱領でこの非アメリカ的な KKK を名指しで批判し、クランの立場を民主党は支持してはいないことを明確に示すべきであると論じた。例えば、マサチューセッツ選出の上院議員デイヴィッド・ウォルシュ（David Walsh）は、第一次大戦中にフランス戦線で戦ったことを振り返り、兵士たちは「黒人か白人か、ユダヤ人かそうじゃないか、カトリックかプロテスタントか」を確かめてから仲間を救ったわけではなかったと述べ、人種や宗教を理由に攻撃することの無意味さを訴えた。また、カトリックでもユダヤ人でもなく、外国生まれでもない民主党全国委員会メンバーでオハイオ出身のエドモンド・ムーア（Edmond Moore）は代表団に向かって、「宗教的偏見に凝り固まった狭量な人間」が民主党大会に参加し、大会の動きを支配しようとしている今、クランを名指しで批判する綱領採択の重要性を考えてほしいと訴えかけた。さらに驚くべきことに、クラン側と思われていた南軍兵士の息子であるジョージア州出身のアンドリュー・アーウィン（Andrew Erwin）は、アメリカで個人に保障された良心の自由の権利をはじめとする重要な原理に直接攻撃を仕掛けている KKK の陰険な活動は国の平和とハーモニーを乱していると述べ、この非アメリカ的で非キリスト教的な団体を名指しで非難できなければ、それは不名誉な敗北であると訴えた。彼の「裏切り」にクランやマカドゥ陣営は怒声をあげ、一方スミス陣営が歓声をあげて旗を振るなど、会場は騒然とした[82]。

これに対して、クランを擁護するノースカロライナ州知事のキャメロン・モリソン（Cameron Morrison）やオクラホマ選出の上院議員ロバート・オーウェン（Robert Owen）らは、KKK という組織にはいささか問題があるものの、個々のクランは敬虔なキリスト教徒であり、真っ当な人びとであると擁護した。しかしオーウェンが、KKK は「憲法と法を守るための団体」と言及したとき、会場からは非難の声が上がった。クラン問題をめぐる地域間の敵意の高まりや民主党の分裂を懸念して、65 歳のウィリアム・J・ブライアンが仲裁に乗り出し、タマニーメンバーやその北東部の支持者の「無作法なふるまい」を叱責しながら民主党の従来路線の維持を訴えたが、その声はブーイングでかき消される始末であった[83]。結局のところ、マカドゥ陣営やブライアンは、KKK を擁護

[82] Smith, *Up to Now*, 284-286; Golway, *Frank & Al*, 146-147, 159-162; Chiles, *The Revolution of '28*, 73; Slayton, *Empire Statesman*, 209-213; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、28 頁。

するわけではなかったものの、マカドゥが指名を獲得するためにはクランの多い南部・西部の票が必要であり、そのためにKKKに対して強い姿勢をとれなかったのであろう[84]。

投票の結果、541.85票対546.15票の僅差で、KKKを名指しで批判する決議案は否決された。票の数えなおしを求める反クラン派の要求で会場は混乱したが、スミスが投票結果を尊重しており、また同時に南部・西部の「兄弟たち」のフェア・プレーを期待しているとのローズヴェルトからの声明で何とか事態は収まった。KKKの問題が共和党大会ではほとんど取り沙汰されなかったことを鑑みれば、この問題をめぐって民主党が分裂の危機にあったことは明白であろう[85]。

KKK問題の決着に続き、共和党政権下での税制措置や農業対策批判、国際平和の希求表明などが採択されてゆく。そのなかで、KKK問題と並んで紛糾すると思われていた禁酒法問題は、「幸福な戦士」演説でローズヴェルトがスミスの立場を曖昧に表現したのと同様、憲法と法の遵守、共和党政権下での禁酒法施行の失敗への非難という間接的な表現にとどまった[86]。スミス自身、自分がカトリックであることや禁酒法施行に批判的であることばかり取り上げられる事態に不満を持ち、進歩的知事としての業績にもっと焦点を当ててほしいと希望しており、そのためウェット派の立場を極力前面に出そうとしなかったことも、禁酒法に関する曖昧な綱領採択につながったと思われる。

続く6月30日、ようやく指名候補を選ぶ投票が開始された。しかし指名に必要な3分の2の票を得る候補はなかなか現れず、7月8日の93回目の投票後、マカドゥが出馬を取り下げることを条件にスミスも候補者指名争いから撤退する意向であることをローズヴェルトが発表する。そして翌日、ついにマカドゥがギブアップし、続いてスミスも撤退を表明した。その後、妥協候補として白羽の矢が立ったウェストヴァージニア出身の弁護士ジョン・W・ディヴィス（John W. Davis）が、103回目の投票で844票を獲得し、正式に民主党大統領候補に指名された。副大統領候補にはブライアンの弟であるネブラスカ州知事のチャールズ・ブライアン（Charles Bryan）が任命され、ディヴィスとともに11月の大統領選挙に臨んだが、共和党のカルヴィン・クーリッジ（Calvin Coolidge）に大差で敗れた[87]。

クリフォード・ベリマン（Clifford Berryman）の風刺画が描くように混乱を極めた1924年民主党大会は、民主党内の支持基盤の変化を明らかにした大会でもあった。そして、農村部を中心とした南部・西部からの支持を取りつけたマカドゥと、都市部を中心とした北東部の、特に移民労働者から熱狂的に支持されたスミスの対立の構図は、1928年の政党再編を予兆させた。マガーが指摘する

---

[83] Chiles, *The Revolution of* '28, 76; Slayton, *Empire Statesman*, 212.

[84] マカドゥは、KKKと縁を切った方が良いのではないかとの友人からの忠告にもかかわらず、指名争いの中で自分の支持者にクランが多く含まれていることを黙認していたが、指名後にこれが問題になるということは認識していた。Golway, *Frank & Al,* 147.

[85] Golway, *Frank & Al*, 163-164; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、28頁。

[86] 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、28頁。

[87] Smith, *Up to Now*, 289-291; Golway, *Frank & Al*, 167-169; 青木「アルフレッド・スミスと都市勢力」、28－29頁。

【103 回もの投票が行われた 1924 年の民主党大統領候補指名大会の喧騒】

クリフォード・K・ベリマンによって 1924 年に発表されたこの風刺画は、当惑した指揮者として擬人化された「民主主義夫人（Dame Democracy）」とチューバを演奏する民主党の長老ウィリアム・ジェニングス・ブライアンを描き、分裂した民主党全国大会の不協和音を表現している。

議会図書館所蔵

出典：SANTAFE NEW MEXICAN
https://www.santafenewmexican.com/news/national_and_world_news/democrats-nomination-brawl-of-1924-took-103-ballots/article_bc1afab1-9207-57d9-9369-4e8f6472fed9.html（アクセス日：2021 年 12 月 28 日）

ように、指名獲得には至らなかったものの、従来の民主党の地盤である南部・西部の農民層やドライ派に支持されたマカドゥを抑え込んだことは、ある意味スミスの「勝利」であったと言えよう[88]。1924 年民主党大会は、4 年後の 1928 年にヒューストンで開かれる民主党全国大会の、そして 1928 年大統領選挙のまさに前哨戦であった。

やや蛇足めいてしまうが、1924 年民主党大会にはもう一つ重要なターニングポイントとでもいうべき要素が含まれていた。のちに民主党を象徴する大統領となる F・ローズヴェルトの復活と、彼とスミスとの関係構築である。スミスのために「幸福な戦士」演説をローズヴェルトが行ったことで、「彼が病を克服しつつあり、遠からず政界へ復帰するであろうことを多くの人々に印象づけた」、と佐藤千登勢は言う[89]。その後もローズヴェルトは、4 期目となるスミスの知事指名獲得のために 1926 年の党大会で基調演説を、そして 1928 年には再度大統領候補に名乗りをあげたスミスの応援演説を行った。この頃の二人の関係についてゴウェイは、「親友ではないが気心の知れた仲間」と評している[90]。また、1930 年代にふたりの間は疎遠になるとはいえ、ニューディール政策にはスミスがニューヨークで行った政策の影響を確かに見て取れよう。こうしたことを考えると、1924 年民主党全国大会は、政党再編と同時に、アメリカ政治の潮目を変える契機であったのかもしれない。

むすびにかえて

1924 年の大会終了後、スミスはすぐに秋の知事選で再選を狙う決意を固め、9 月には民主党州大会において全会一致で候補者に指名された[91]。共和党候補にはセオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）の息子、セオドア・ローズヴェルト・ジュニア（Theodore Roosevelt Jr.）が指名されたが、政治経験の浅い彼を前にしてスミスは、早々に勝利を確信した[92]。実際、大統領選挙でディヴィスとブライアンが大敗したのをしりめに、スミスは 10 万 8,000 票差をつけて大勝した。3 期目を迎えたスミスは、病院・刑務所・州立公園など必要な公共建築物の建設や改善に精力的に取り組み、公債の発行や税制の見直しを行うなど、その手腕を発揮する。彼自身、自叙伝のなかで、「1926 年にそれまで行ってきた仕事の収穫の刈り入れを始めた」と振り返っている[93]。その 1926 年には 4 期目となる州知事選に出馬し、共和党候補に楽勝した。また同時に、盟友ロバート・ワグナーを合衆

---

88 McGirr, *The War on Alcohol*, 169; Slayton, *Empire Statesman*, 216.
89 佐藤『フランクリン・ローズヴェルト』、60 頁。
90 Golway, *Frank & Al,* 177.
91 スミスは自叙伝のなかで、早々に出馬の意向を固めた理由として、秋の大統領選挙に臨むディヴィスを後押しするためであったと述懐している（Smith, *Up to Now*, 292）。
92 Smith, *Up to Now*, 292.
93 Smith, *Up to Now*, 354.

国上院に送り込むことにも成功し、民主党内のみならず、アメリカ政界での存在感を増してゆく。そしてついに 1928 年、ヒューストンで開かれた民主党全国大会でスミスは大統領候補指名を獲得することになる。

本稿では、スミスの政治的キャリアの前半生ともいえる 1924 年民主党全国大会までの彼の足跡をたどり、整理した。従来の民主党リーダーとは異なるタイプのスミスが党内で頭角を現すことのできた理由として、二つのことが挙げられるように思う。まず一つは政治の世界で、20 世紀転換期の産業化、都市化、移民の流入で発生した諸問題に対応し、都市で暮らす大勢の人々の今までとは違う、そしてマシン流の個別救済では対応不可能な新しい要望に応える必要が出てきたことである。自らも新旧の移民がひしめくマンハッタンのロワー・イーストサイドで生まれ育ち、若くして父を失い、苦しい生活を送ったスミスは、ローズヴェルトのような山の手育ちの政治家とは違い、都市労働者や様々なエスニシティからなる大衆の要望を肌感覚で察知することができた。こうしたスミスの存在を、新来移民を取り込もうと躍起になっていたアイルランド系の政治マシン、タマニー・ホールのリーダーは見逃さなかった。またスミスの打ち出す政策は、パーキンスやモスコヴィッツなどの社会活動家が求めるものと重なることも多く、革新主義改革者の彼らと、しばしば彼らの嫌悪の対象となっていた政治マシン出身のスミスは接近し、協力関係を結んだ。こうして、スミスはまずはニューヨークの民主党内で、そしてやがては全国民主党内で、その存在感を増していった。

二つ目は、1920 年代に民主党が勢いを失っていたということである。ウィルソンの不人気もあり、大統領選挙のみならず、連邦および各州の議会選挙でも民主党は苦戦を強いられていた。ニューヨークも例外ではなく、ごく短期間を除いて、州議会は上下両院とも共和党が多数を占めていた。だが、そうした状況であったからこそ、民主党は従来とは異なる異質な存在をその中心に受け入れることができたのでないだろうか。1896 年大統領選挙に民主党候補として出馬したブライアンは、それまでの民主党の支持基盤であった農村のみならず、都市の有権者も取り込むべく、農民と都市労働者からなる「額に汗して働く労働大衆」を金融資本家に対峙する存在と位置付けた。しかし、道徳的な農村に対して都市は堕落していると描くなど、彼の構想はいささか中途半端であった。その背景には、相変わらずワスプ的な文化が幅を利かせていたということもあろう。それに対して、スミスが政治家としてのキャリアを確固たるものにした 1920 年代は、南欧・東欧からの移民の大量流入の影響で北部都市を中心により多元的な社会が到来していた。共和党に比べて、失うものはたいしてなかった民主党の方が、そうした社会の変化に合わせて自らも変わることが容易であったのではなかろうか。

1924 年民主党全国大会では、従来の民主党支持層に支えられたマカドゥを、新しい都市の時代を象徴するスミスが抑え込んだ形となった。そして、スミスを熱狂的に支持した北部都市の労働者

は、1928 年の大統領選挙ではスミスを、1932 年の大統領選挙ではスミスを破って民主党候補として出馬したローズヴェルトを支持することになる。もちろんそれには、大恐慌による経済的衝撃が大きく影響したことも間違いない。1896 年大統領選挙から始まった民主党再編の道は、曲がりくねり、時には分岐しながら、ニューディールに通じていた。

「禁酒法時代のアルフレッド・E・スミス」というタイトルでありながら、本稿では 1924 年までのスミスの足跡をたどるにとどまった。「進歩派知事（progressive governor）」とも称される彼の「進歩」の実態を考えるには、民主党大統領候補としてスミスが 24 年時よりももっと攻撃的に KKK や全国禁酒法への反対を訴えた 1928 年大統領選挙を分析する必要がある。28 年選挙でスミスは、エスニックな都市労働者ばかりでなく、アフリカ系アメリカ人の一部を取り込むことに成功したが、結局、地盤であるニューヨーク州さえも失い、敗れる。次回は、この 1928 年選挙を中心に分析し、彼の政策や考えの「進歩」の内容とはいかなるものであったのか、そして彼の政治は何を目指していたのかについて考察する。